

私の友人に、日雇労働者をしている牧師がいます。正確にいうと、彼は牧師の資格をもっている日雇労働者です。大阪の釜ヶ崎という所で、今も日雇労働者をしています。これは珍しいことです。大阪の釜ヶ崎や名古屋の笹島、横浜の寿町や東京の山谷、これら寄せ場と呼ばれる町で働いている牧師は何人もいます。けれどもそれは牧師として、それらの町にいる日雇労働者への支援のために、何らかの形で関わっているのです。支援活動という形での伝道であり、イエスの福音を身を持って表すための支援活動でしょう。しかし牧師自身は、日雇労働者ではありません。

ところが私の友人の場合は、それとはまったく違います。あくまでも本人が日雇労働者なのです。彼が過去に牧師の資格を得たというだけのことです。彼は、同志社大学神学部を卒業するに当たって、牧師試験を受けて合格しました。しかし牧師にはならず、卒業後すぐに釜ヶ崎に入り、日雇労働者として工事現場で働くようになりました。

私がお大阪の保育園で働いていた頃のことです。ある時彼と、久しぶりに一緒に飲みに行こうという話になりました。約束の日時を決めると彼が言いました。「今は銭ないけど、その日に備えてがんばって日雇やとくわ」。

約束の日待ち合わせの場所に行くと、彼が開口一番言いました。「滝口すまん。わし、きょう銭ないねん」。「なんでやねん。お前、日雇がんばって金貯めとくって言うてたやないか」。「なんでって、今週雨ばかりやったやろ。雨降ったら日雇に行かれへんねんから、しゃーないやろ」。日雇労働者の仕事は屋外での肉体労働ですから、雨が降ると仕事はありません。「そらしゃーないなあ。ほんならきょうは俺のおごりでええわ。ほんでお前、なんぼ持っとんねん」。すると彼はポケットに手を突っ込んで言いました。「200円や。全財産や。ここに来るまで電車賃で160円使うたから、360円はあったんやで。こない雨ばかりやったのに、360円も持ってたんは奇跡や。滝口と飲む約束のために、電車賃だけはとっとなアカンと思てたんや。わしも偉いやろ？」。

そう言われるとその通りで、約束を果たすために360円を残していたのは偉いわけです。そのために彼は、もしかしたら食事を抜いている可能性もありました。ですから言いました。「わかった。きょうはせいぜい飲み食いしてくれ。そのかわり安い店やぞ」。

居酒屋で勘定を払う段になると、彼がポケットから200円を出して言います。「これも使うてくれ」。「ええよ、ええよ。きょうは出しとくから。また日雇で稼いだ時におごってくれ」と言いました。すると「アカン。気持ちの問題や。借りを作るのは嫌いやねん。わしも出す。これで割り勘ちゅうことにしよ」。「アホか。割り勘いうのは半分ずつ出すことやないか。なんで200円で割り勘やねん」。すると彼が言います。「何をぬかしとんねん。お前がなんぼ払うちゅうねん。お前のは全財産とちゃうやろ。わしの200円は全財産やぞ。お前は聖書を読んどらんのか。わしの200円はレプタ硬貨2枚と一緒にや。ありがたく受け取らんかい。イエスさんも言うてるやろ」。

さすが牧師です。200円に説得力が加わります。確かに聖書には次のように書かれています。マルコによる福音書12章41節以下です。「イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。『はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである』」

私はその日、2人分の飲み代で、財布に入っているお金のすべてを使い果たしましたが、彼の200円とは重みが違います。私の場合は銀行に行けばいくらのお金がありますが、彼の200円は、確かに生活費の全部でした。結局200円をありがたく受け取り、支払いの一部に当てました。

2人で一緒に駅まで戻った時に、帰りの電車賃が気になりました。「なあ。お前どうやって帰るんや。電車賃ないやろ?」。彼は言います。「かまへん。駅の改札ぐらい強行突破したる」。「それはアカンやろ」。「ほんならどっか、道端で寝る」。「雨降ってんのに、それもアカンやろ。そうや、俺回数券持ってるわ。これ切り離したら無効って書いてあるけど、まあなんとかなるやろ。1枚やるわ」。

そう言いながら、2人で電車に乗り込みました。電車が走り出すと彼が言います。「滝口、向こうにでっかいビル見えるやろ。あれ、わしが作ったんや」。「えっ」と言うと、「あのビルな、わしが鉄筋組んでできたんや。28階建てや。上でバランス取りながら鉄筋運ぶの、めっちゃ怖かったわ」。

しばらくすると、電車が川を渡ります。すると彼が言いました。「今、川渡ってるやろ。この橋な、わしが架けたんや。川の上で鉄骨のネジしめんの、むっちゃ怖かったわ」。思わず感想がもれました。「お前、なんかようわからんけど、すごいなあ」。

私の最寄り駅に着いたので、別れを告げて先に電車を降りました。そして改札を通る時に、自分の持っている回数券が140円であることに気付いたのです。すぐに、彼が待ち合わせの場所に来るための電車賃が160円だったと言っていたことを思い出しました。その差額20円。しかし駅員がそれを素直に見過ごしてくれるはずはありません。

数日後、釜ヶ崎の古い木造アパートに住む彼を訪ねました。「こないだ、あのあと、どうなった」と聞くと、彼が話しました。「駅員がやなあ、『これでは改札通すわけにはいきません』っちゅうさかい、『ほんならええわ。もうここで寝るわ』って言うて、改札の前で横になってん。そしたら駅員が『そんな所に寝てもらったら困ります』っちゅうねん。『せやろ、わしも困ってんねん。いっしょやがな。2人とも困らん、なんかええ方法ないかなあ。考えてくれ』言うたら、ほんまに『う〜ん』いうて考えとんねん。せやからその隙に、助走つけてジャ〜ンプや。強行突破したった。けどそれはどうでもええねん。問題はその後や。わしは人生で一番情けない経験をした。

釜ヶ崎に戻って来てな、道を歩いてたらな、道端で寝てるおっちゃんが、わしの目の前で寝返り打ったんや。ほんで顔は水溜まりの中や。そのまま寝てたらおぼれて死ぬがな。しゃーないから、おっちゃんの足持って、水溜まりからひきずって出したんや。そしたらおっちゃんが目さまして、『にいちゃん、100円くれ』言うねん。わし100円なんか持ってないやんか。『おっちゃん、悪いけど100円ないねん』言うても、『にいちゃん、ほんまに100円でええねん。なあ、100円だけくれ』言うてんねん。『おっちゃんも雨で仕事ないんか?』って聞いたら、言いよんねん。『アカンねん。わし工事現場で落ちて、足折れてな。持ってた金全部治療費や。せやから、ずっと公園で寝とってん。そしたら今度は足凍傷になってな。もう、ちゃんと動かへんねん。仕事にも行かれへんねん。なあ、100円くれ。100円あったらなんか食えるんや。100円だけでええねん』。

くそー、なんでわしは今100円持ってないねん。100円あったらこのおっちゃん、パンの1個でも食えるのに、なんで100円がないねん。そない思うたら涙出てきて、情けのうなって、なんもでけへんし、わし、おっちゃん放って帰って来てしもた。

けど気になってな、次の日に同じ場所へ行ったんやけど、おっちゃんおらへんかったわ。三角公園にも行って、たき火囲んでるおっちゃんらに聞いたんやけど、知らんって言われた。あのおっちゃん、ちゃんと生きてるかなあ。わし、逃げたんや」。

私は大学生の頃、数年続けて、釜ヶ崎での越冬パトロールに参加していました。不安定な生活を強いられる日雇労働者が寒い冬を越せるように、1人でも道端で死んでいく人が少なくなるようにとの願いをもって、いろいろな教会から来た人々と一緒に、深夜の釜ヶ崎をリヤカーを引いて歩き、毛布や布団を配り、100円カイロやインスタントみそ汁を渡しました。私の経験については、以前にお話したことがあるので、きょうは話ませんが、代わりにある方の文章を引用させていただきます。

「ちょうど20年前の冬、大学生活も終りに近づき、どう生きていったらいいかわからないでいた僕を、父は大阪の釜ヶ崎という寄せ場に連れて行ってくれました。そこで行われていた越冬パトロールを『ちょっと手伝ってくれへんか…』との言葉に断る理由もなく、釜ヶ崎がいったいどのようなところなのか、越冬っていったい誰が何のためにしているのかなど知ることもなしに出かけて行き、4日ほどそこで過ごしました。

みんなで群れを作って出かけて行くと、釜ヶ崎の人たちから様々なことを言われました。『所詮一時的にわしらにお情けの気持ちを示そうとしたって、だまされへんで！同情なんていらんわ』『お前ら、世の中わかってへんやろ。わしらの気持ちがわかってたまるかい』

そんな人たちも、道端でドヤ（簡易宿泊所）に入るお金も無くダンボールや新聞紙にくるまって寝ている人々のことを心配していました。『あいつらをなんとか助けるんやったら、外から来たあんたらとも、力あわせたってもええで』というような言葉と共に、一緒に町を周り、中には凍死を待つのみという状態の人たちを励まして、三角公園という小さな公園に誘います。そこでは、同じ様な境遇の人々が、凍死だけはしないように仲間が起こしたたき火を囲んで朝を待っています。日頃の鬱憤と寒さしのぎに酔っぱらってくだ

をまいている人がいるかと思えば、じっと燃える炎を見つめたまま動かない人もいます。いろいろな人生の重さが一人一人の肩にずっしりとのかかっているのが、言葉無くして強烈に伝わってくる経験でした。

一人の小さな高齢の男性が、たき火のそばにやってきた小さなやせこけた野良犬にしきりに話しかけているのが聞こえました。『お前も腹すいとんねんやろうなあ。わしが何か持とったら、一緒に食べられるんやけどなあ。すまんなあ。すまんなあ…』。

様々な人にたき火の周りで会いました。みんな、このうえもなく優しい人々でした。そして、そんな彼ら在必死の思いで助け合おう、死んだらアカン、また明日一緒に生きようやないか…という思いだけで集まっているにもかかわらず、その人々を『道路交通法違反』という名目で、盾と警棒で蹴散らしにやってくるバス数台に乗った機動隊にも会いました。この力ない人々が、その日の命をつなぐために力を合わせる、それだけのことが、社会にあって強い立場にある権力にとっては脅威に値する出来事であることも知りました。

たき火の周りでの日雇労働者の人々との出会いが、キリストとの出会いであったと悟るまでに、僕にはあと数年が必要でした。クリスマスが、釜ヶ崎や寿町のまっただ中で起こっていたのだと知るまでに、長い寄り道も経験しました。でも、あそこでの、あの人々との出会いが無かったら、僕のクリスマスは全然違うものになっていたかもしれません。

羊飼いたちも、たき火を囲んでいました。その日一日の労働に疲れ果てて、あるいは、思い通りにいかなかったその日をふり返りながら、たき火のむこうを見つめていました。

旧約聖書の時代、羊は人々にとっての主要な財産でした。ですから羊をたくさん持つことは、その人の繁栄を表す基準でもありました。実際、アブラハム・イサク・ヤコブ・エサウなどは、おびただしい数の羊の群れを所有していました。それはいわば、旧約聖書の世界における、その人物の信用度を表す評価基準でもあったわけです。羊を多く持っていればいるほど、その人は周囲から評価されたということです。最も身近な家畜である羊を忠実に増やしていくことが、価値あることだと考えられたのでした。

羊は身近な動物であるがゆえに、神に捧げる犠牲としてもよく用いられました。犠牲の動物を伴う神殿での儀式や、また家庭での礼拝においても羊は不可欠なものだったのです。

そのように身近な存在であって、なおかつ必要不可欠な羊でしたが、その羊を飼う羊飼いについての評価は、時代を追うごとに変化していきます。イスラエルで最も偉大な王とされるダビデが羊飼い出身だったにもかかわらずです。

人々の生活は時代の変化の中で、牧畜中心から半牧半農へと変化していきます。牧畜もすれば農業もするという生活です。それがやがて定住生活となり、町を作って共同体として生きようになっていく時代には、牧畜はすたれ農業が中心となっていきます。

人々は自分の家から自分の土地に働きに出るようになる、あるいは、自分の家から地主に借りた土地に農作業のために通うようになります。その一方で、必要不可欠な羊の牧畜は、金持ちが使用人である羊飼いに任せるようになっていったのです。ほとんどの人々が自分の家で暮らすのが当たり前になったためです。

羊飼いたちは低賃金で使われました。羊飼いは羊の群れを追ったり、その羊を集めたり、羊の名前を呼んで個性を見極めたりするという特種技能を持っていたのですが、自分の家を持たない、定住生活をしないという理由で、普通の人々より下に見られました。羊の群れを餌のある場所へ移動させなければならないという生活の宿命を負っている羊飼いにあって、定住生活をしないということは当然なのですが、大多数を占める普通の人々の基準では、それは異常なこと、劣った生活、人と一緒ではなく動物と共にある暮らしだと受け止められたのです。

それゆえの低賃金と、それにみあわない肉体労働、それが羊飼いとての生き方でした。さらに羊飼いに、常に身を危険にさらさなければならないという状況がついてまわりました。羊飼いは羊と共に暮らすことで、いつも外敵の存在を意識しないではられません。ヒョウ・ライオン・クマ・オオカミ、パレスチナの荒れ野にはそれらの猛獣もいます。猛獣は生きるために、自分よりも弱い動物を見つけて食べます。もしそれに抵抗する者があったとしたら、その抵抗する者から殺します。それが羊飼いとての存在でした。

しかし羊飼いは、羊を守るのが仕事です。もし猛獣に羊を食べられてしまったとしたら、雇主からペナルティーを課せられます。ですから羊の身を守るために、時として自分の命をかけて猛獣に向き合うこともあったのです。その結果、死んでしまうこともありました。

そのような羊飼いの立場は、イエスの時代になるとさらに差別的になっていきます。羊飼いは社会の最下層の貧しい人々の代表のような存在でした。自分の財産でもない羊の世話をし、労働はきつく報酬は少なく、羊に何かあればペナルティーがついてくる。本当に食うや食わずの生活をしていたのが羊飼いでした。

そのうえ、羊飼いたちが羊と一緒に生活していた荒れ野は、特別な場所でした。ユダヤ教では、荒れ野は悪魔の住む場所だと考えられていたのです。ですから羊飼いたちは「悪魔の住む荒れ野を歩きまわる汚れた者」であるとされました。そのようなレッテルを貼られて差別され、人々から嫌われ、神殿や律法からも縁を切られて、神に相手にされない者たちという分類の中に加えられていました。

その羊飼いたちが、寒い冬の夜、からだを寄せ合って、暖をとるために仲間が起こした、たき火を囲んでいたのです。

あたりを包む夜の闇、自分たちを包む孤立感、生活を包む貧しさ、そのような暗闇の中で、たき火の明るさは、人の住まない荒れ野に、命が存在することの証しでした。からだを暖めるばかりではなく、たき火は羊飼いたちへの一時の慰めでした。たき火を前にすることは、きょうを生きているしるしであり、明日もなんとか生きていける小さな希望でした。

「すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らした」のです。たき火の明るさを圧倒的に凌駕する神からの光でした。

天使の告げる救い主は、飼い葉桶に寝かされていました。聖書は言います。「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」。

飼い葉桶に寝かされる産まれたばかりのイエス。飼い葉桶とは、家畜に餌を食べさせるための入れ物です。暖かなベッドでも、柔らかな毛布でもなく、家畜の餌入れに、粗末な布にくるまれて寝かされていたのです。それは人々の生活からかけ離れた光景です。幼い子を飼い葉桶に寝かせたい親はいません。

しかし羊飼いの生活では、それは驚きでも異常でもありませんでした。もしあかちゃんが産まれたならば、飼い葉桶に干し草を敷いて、ぼろ布でくるんで寝かせるのが普通のことだったのです。

救い主は、ぼろ布にくるまって飼い葉桶の中に、羊飼いの生活感覚のままに産まれました。貧しく、差別され、人々から嫌われていた羊飼いのあかちゃんのように、誕生したのです。

たなべしゅんという作家が、次のような言葉を書いています。

「キリストにお会いしたいと思って、教会に電話してみましたが、留守でした。日曜の午前中ならと思って、でかけてみましたが、やっぱり留守でした。仕方ないので午後から寿町の寄せ場に行きました。炊き出しに並ぶ日雇労働者の長い列…。野宿する者に配る毛布やスープを用意している人たち…。

街角で後ろから肩を叩かれました。

ふり返ると…、そこにキリストが立っておられました」。

寄せ場の日雇労働者にも、荒れ野の羊飼いやにも、同じことが言えます。彼らは、貧しく、汚れていると差別され、人々から嫌われることを実感するという孤立感の中でしか生きていけない人々です。それが、たき火を囲む人たちなのです。

だから、神はイエスを与えられたのです。暗闇の中の光として、世の光として、揺れるたき火の炎のむこうに、圧倒的な輝きとして、救い主の誕生を告げ知らせたのです。

そして、「悪魔の住む荒れ野を歩きまわる汚れた者」であるとされ、神殿や律法から縁を切られていた羊飼いたちが、「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」というふうに変えられていくのです。

彼らは見たのです。自分たちの生活の中に表された神の意志を、自分たちの生きる場所に与えられた救い主を、自分たちのただ中に働きかけてくれる神を、彼らは見たのです。

イザヤは告げています。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」。

私たちにもそのような光が見えるはずです。現実というたき火のむこうに、圧倒的な輝きが与えられ、私たちの生活のただ中に表された神の意志が見えるはずです。

私たちの前方に輝く光を見つめながら、歩みを進めていきたいと思うのです。